

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーパイザー  
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



1月24日、プレゼンテーションにて

「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

群馬県選出の匠、革職人の「小野里健」さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨半夏、レクサスキャリアー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



プレゼンテーションの様子

の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARIA クリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE/代表取締役社長デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター/プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも歩みを進化している。

く足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国

親の愛を「子の手」に  
革職人が考案した手作りランドセルキット

既製品には無い  
魅力を提案

小野里さんは前橋市内のかばん店に18年勤務しながら個人での活動も少しずつ行い、2016年に独立して高崎市内に「雨ザラシ工房」を立ち上げた。現在はカバンや財布、革小物などの制作・販売と修理を行う。小野里さんの作品は、可愛らしさや素材さの中に素材の力強さを併せ持つ特長を持つ。多くの革問屋と取り引きをする中で、革の良さをいかに引き出すかを考えるようになったという。素材感を追求しながら、既製品とハンドメイドの中間を意識した制作を心がけている。



小野里さんの店舗兼工房

今回プロジェクトに応募するにあたり、以前から考えていた企画案が合うと感じ、応募を決意した。それは革職人が監修した「手作りランドセルキット」。パーツを購入して、自ら縫い合わせて子や孫のためにランドセルを組み立てて贈る。既製品が当たり前のマーケットに「手作り」という新たな魅力を提案するものだった。しかし、プロジェクトが動き出すと、商品化するまでにはいくつもの壁



エリア・コンサルティングにて

が立ちほだかった。通常は小野里さん自身が設計して組み立てて販売しているが、今回は組み立てる工程以降は購入した人が行う。そのため、誰にでも組み立てられるように、作る立場のことも踏まえる必要がある。さまざまな立場から作品へのアプローチを行った。デザイン・サイズ・パーツの数・耐久性など、6年間使い続けられるための最適な設計は困難を極めた。わずかなズレも全体のバランスに影響を与えるため、金型にも精度が求められた。設計図も練り直しを重ね、革や糸、金具に至るまで材料も吟味。今まで作ったことのないコンセプトのプロダクトを模索する日々が続いた。思っていた以上に多くの課題を解決しなければ商品化に間に合わない。そんな中、エリア・コンサルティングでの下川氏からのアドバイスが一つの分岐点となる。「ゼロからランドセルを作るというより、ある程度完成したパーツを組み立てるような形でも充分満足感を得られる」という一言で、縫い合わせが難しい肩当て部分などはあらかじめパーツ化することにしたり。パーツ数も合計で25点になり、方向性が固まった。主なパーツには、よ



組み立てるパーツの一部

素材感を活かした革の質感を大切に



革を縫い合わせる小野里さん

小野里さんは「悩んでいたことの解決策を提示してもらえた」と振り返る。商品名も、多くの人の「この手」から伝わる愛情や温もりを表現した「conote」に決定した。商品の性格上、簡単すぎても難しくてもいけないという難度のバランスが求められるが、購入してから完成するまでは1日2時間程度の作業で約1か月と想定している。制作過程を子どもに見せることは他のランドセルにはない魅力となりそうだ。ミシンを使わず手縫いで仕上げることでできるので、大きな音が出せない環境でも作ることが可能だ。

また、手作りならではの特長も備えている。パーツを縫い合わせる途中、革と芯材の間に子どもに向けた手紙や写真などをに入れておく。卒業式を終えた後に分解して、6年前のメッセージを開封するというタイムカプセルのような機能も持たせることができた。自分自身で組み立てるから、途中の修理も簡単に行える。

小野里さんは、今回のプロジェクトを「生みの苦しみはあったが、形になったことの喜びが大きい」と振り返る。購入者にランドセルを組み立ててもらおうというコンセプトもあり、ユーザーの目線・組み立てる人の目線など、今以上に多角的に制作に取り組んだという。地域性という点でも、ランドセルの背当てと肩当てに尾瀬のシカ革を使用し



完成プロダクト「conote」



小野里 健一  
群馬/雨ザラシ工房 革職人

1977年群馬県高崎市生まれ。工業高校卒業後、建築会社に就職。その後県内の靴業界に転職し、革製品の製造・修理・販売に18年間従事。2016年雨ザラシ工房を開業。現在も創作活動と並行して修理業務にも力を入れている。平成28年度グッドデザインぐんまでは、主力商品の一つ「くりがま」が奨励賞を受賞。県内外のクラフトフェアや個展を重ね、日々モノ作りと向き合っている。

LEXUS  
NEW  
TAKUMI  
PROJECT

小野里 健一 群馬/雨ザラシ工房 革職人



思いを込めて縫い合わせるランドセル